

年間第二主日

2010.1.17

ヨハネ 2・1-11

今日は年間第二主日の日曜日です。今日が年間の第二主日だとすると、先週の日曜日は年間第一主日だったわけですが、先週は主の洗礼の祝日でした。どうしてこうなっているかという、典礼暦では毎年年間の第一主日は主の洗礼の祝日として祝われることになっているからです。主の洗礼から始まるこの年間の季節は、灰の水曜日に始まる四旬節まで続き、最も大切な、主の受難と復活の超越の神秘を祝った後、聖霊降臨の翌日から、再び待降節の前まで続きます。この年間の主日ごとに私たちは、福音書に記されている順を追って、受難に至るまでのイエスの歩まれた主な足跡をたどり、そのみ言葉に耳を傾けます。福音書は四つありますが、順を追って朗読される福音書の箇所は、三年ごとにマタイ、マルコ、ルカの福音書から選ばれ、その間に、今日のようにヨハネ福音書が朗読されることもあります。

今日の年間第二主日にヨハネ福音書のカナの奇跡の箇所が朗読されるのは、これがイエスの行われた最初のしるしであり、それによって、ヨルダン川での洗礼の場面で、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と天の御父に呼びかけられたイエスが、私たちの中で神の御子としてその栄光を現されたからです。今日の福音はヨハネの2章の最初に語られている出来事ですが、少し戻って、ヨハネ福音書のこの箇所の前の所から読むとイエスと出会った弟子たちがイエスの後につき従って、イエスと一緒に今日のカナの婚宴に招かれたことになっています。そして、今日の福音の最後には、この奇跡の場に居合わせた弟子たちが、イエスの栄光のしるしとしてのこの出来事を目撃して、イエスを信じたと言われていました。

新年を迎え、お正月を過ごしたばかりのこの2010年も半月が過ぎました。私たちを取り巻く社会の動きは留まることなく、その中に生きる私の生活もまたいつものあわただしさに囲まれています。そのような社会と生活の中であって、私たちはこうして日曜日、ミサにあずかり、聖書のことばに耳を傾けます。それは、私たちの日々の中に私たちが信仰において出会った、福音書に語られているイエスがともにいてくださることを信じているからです。クリスマス私たちがお迎えした人となられた神の子イエスは、あの誕生の夜と同じように、私たちの中にその居場所を求めおられます。その居場所は、最終的には私たち一人ひとりの心のうちにあります。このようにめまぐるしい社会の中に、自分の生活に忙殺されている私たちの心の扉が開かれるために、私たちはこのミサのひと時を必要としているのです。そこにおいて、私たちが信じるイエスは、福音書に語ら

れている弟子たちが出会い、その後について行ったイエスであることを思い起こさせられるのです。私たちの心が開かれ、ミサの福音のたびに聴くイエスのお姿に、私たちの心の目を向けることが出来るなら、そしてミサの中で心を落ち着かせ、イエスご自身の御からだである聖体を、そのようなものとしていただくことが出来るなら、私たちのこの日々は、イエスの弟子たちが過ごした日々と同じように、イエスとともに歩む日々となることでしょう。

今日の福音のカナの婚宴の場には、イエスの母マリアがおられ、イエスとその弟子たちもそこに招かれたと語られています。けれども、誰がイエスとその弟子たちをそこに招いたのかは語られていません。マリア様がどのような関係でそこにおられたのかも語られていません。弟子たちはおそらくイエス様がそこに行かれることになったので、イエス様と一緒におよびれすることになったのでしょう。私たちがイエス様とマリア様をお招きするとしたら、それは大事で、緊張のあまり夜も眠れないことになるかもしれませんが、私たちが日曜日のたびにここでお会いするイエス様は、私たちよりも先にここにいてくださり、私たちもまた招かれた者としてこの場でイエス様と席をともにしているのです。あるいはあの弟子たちのように、イエス様がここにこうしておられるから、イエス様の弟子であるということで、大丈夫、君たちもここにいなさいとイエス様に言っただいて、ここに招かれているのです。そしてイエス様が水からぶどう酒に変えてくださった、ふるまいの杯を味あわせていただくのです。

弟子たちも、弟子たちと一緒に席についていた婚宴の客たちも気づかなかったことでしょうが、舞台裏では大変なことが行われていたのです。マリア様に促されたイエス様のおことばに従って、召使たちは何故そんなことを自分たちがしなければならぬのか説明もないままに、大きな甕から水を汲んで、杯を水で満たしていたのです。それも、酒に酔った宴会の客たちの幸せそうな声が届いてくる薄暗がりの中で。私たちの生活や仕事も、多くの場合このようであるかもしれません。私たちにはそのようにしか思えないときが多くあるかもしれません。

カナの婚宴の出来事はイエス様がそこにいてくださり、あのようなことをなさってくださったから、聖書に記される出来事となったのです。イエス様とマリア様はあの場に居合わせた全ての人を包んで、そこにいてくださるのです。喜びの宴の途中で、肝心のぶどう酒がなくなりかけていることにも気づかずにいる、新郎と新婦とその親たち、裏がどうなっているのか、そこでどのようなことが行われているのか、考えてみることもなく無責任に宴に興じている婚礼の客たち、裏の事情が分かっているがゆえに、これからどうなることかと気が気でない宴会の責任者、そしてそれが割り当てられた仕事だと諦めて黙々と、意味の分からない仕事を続けざるをえない召使たち、あのカナの婚宴の一部始終は、私たちの今の社会の縮図のようにも思えてきます。そしてイエスとマリアはあの時と同

じように、それら全ての人々とそれぞれの思いを包み込んでそこにいてくださるのです。私たちの真ん中に、ここにいてくださるのです。

私たちが生きはじめたこの新しい年も、私たちが生きてきた全ての年つきと同じように、あのカナの出来事を繰り返すことでしょう。だからこそ、あのカナの婚宴の席に招かれておられたイエスとマリアが私たちの中にいてくださり、この一年私たちがくみ上げるただの水としか思えないものを、香立つ感謝と喜びの杯に変えてくださるようお願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高